

「はがき新聞」の活用実践

－高等学校における効果的な「はがき新聞」活用法について－

兵庫県立伊川谷高等学校 校長 小川 卓也
主幹教諭 福田 浩三

1. 実践の背景・目的

生徒全員へのタブレット導入など、書くことによる学びが減っている現在において、「紙に書いて思考力を養う」という学習は、その機会を生徒に与えることが今後の教育活動において重要であると考えます。そこで、新入生に対して「限られた紙面に伝えたい内容を効果的にまとめる」ことを目的に、自己紹介文を「はがき新聞」にて作成し、廊下へ掲示することで、相互共有を促した（図1）。



図1 「はがき新聞」の相互評価の様子

「はがき新聞」とは、児童生徒がはがきサイズを主とする制約ある大きさの紙面に読み手意識をもって新聞形式で要点をまとめ、表現する取り組みであり、様々な実践例がウェブや書籍等にて紹介されている。しかし、その実践例は小中学校の児童生徒のものが多数を占め、高校における実践例は限られている。兵庫県立伊川谷高等学校では2018年度から2025年度までの7年間、公益財団法人理想教育財団より助成を受けるとともに、2022年度から2025年度までの4年間、一般社団法人日本新聞協会のNIE実践指定校としてNIE実践を行なってきた。その中でも「は

がき新聞」を用いた複数の実践について、生徒の作品を含め報告する。

2. 「はがき新聞」の実践

実践対象は兵庫県立伊川谷高等学校にて筆者が当時担当した2020年入学生および2023年入学生、または学校設定科目「コミュニケーション基礎」を受講した30名である。該当生徒は入学時に図2に示す自己紹介はがき新聞課題を与えられ、以後も学校行事の度に感想を「はがき新聞」にまとめることで、教師の特別な指導がなくとも生徒が当たり前のように「はがき新聞」で感想を書く状態を作り出した。また、授業や特別活動等で他の教員も自由に「はがき新聞」を活用できるよう、複数のサイズ、形式の「はがき新聞」用紙をあらかじめ用意、保管した。

自己紹介と記入（枠の上）

『これからの抱負』を表す一文字を上大きく書き、その文字を選んだ理由を下に書いていく

2023年4月〇日（曜日）の様に完成日時を記入（枠の上）

名前(ふりがな)
書体(文字の形)も自分で工夫するといいいよ

4桁の生徒番号 1〇〇〇
これを機に覚えよう！

趣味・特技・入りたい部活・性格・長所・短所・・・
自分で思いついた事を、思いついた風に記入。縦書き横書き OK！レイアウト自由。もちろん絵が入っても良い！

どの様なレイアウト・文・文字・色等が「自分」を伝えられるのか、意識しながら書いていこう！

※利用規約：公益財団法人理想教育財団

はがき課題 自己紹介をしよう！

マス目が小さいので、1マス1文字でなくて構いません。文字の大きさは自由。
左側の『これからの抱負』は名前をイニシャルに替えて学年通信に載るかも？
本家大元の新聞を思い出して書いてみると良いかも
これから3年間、こんな感じで『はがき新聞』をたくさん書いてもらいます。
一番上の枠a、bは外枠のすぐ上に、他の内容は用紙外枠内に収まる様に書く。

完成した作品は、毎度各教室の廊下側窓に掲示して誰もが見られる状態にするので、常に「人に見られる」事を意識して書いて下さい。

図2 「はがき新聞」の説明プリント

2.1 行事の感想「はがき新聞」作成

遠足や文化祭、体育大会などの学校行事ごとに感想「はがき新聞」を作成し（図3）、教室の廊下側壁に掲示して生徒間で共有した。また、クラスや授業によっては、行事以外でも担任や授業担当者が自由に「はがき新聞」用紙を活用して、

- ・推薦図書紹介（LHRにて）
- ・進路の説明を受けて感想（LHRにて）
- ・七夕の願い事（LHRにて）
- ・6月のありがとう・7月の目標（課題）
- ・修学旅行の英語感想（英語コミュニケーション）

などの「はがき新聞」を作成していた。一つの学年で3年間「はがき新聞」の実践を継続することで、様々な表現を用いた「はがき新聞」の感想が作成されることとなった。

【実践データ】

【対象】
2020年入学生3年間
全5クラス201名
2023年入学生3年間
全5クラス201名

【時数】
LHR・課題等
1時間

【使用サイズ】
はがきサイズ



図3 行事感想での活用

2.2 SDGs レポートの作成

近年、生活の場面でよく見られるSDGsについて、その内容を理解すると共に、個人も世界と繋がっているということを意識した行動を生徒に促すため、SDGsの全体学習の後、生徒が各自でSDGsに関する課題を設定し、A5用紙の「はがき新聞」を作成した（図4）。作品は廊下に掲示することで、生徒間の共有および相互評価をした。クラスによっては、掲示された「はがき新聞」にコメントを記した透明付箋を貼り合うなど、評価方法の工夫も見られた。

【実践データ】

【対象】
2020年入学生1年次
全5クラス198名

【時数】
総合的な探求の時間
計4時間

【使用サイズ】
A5サイズ

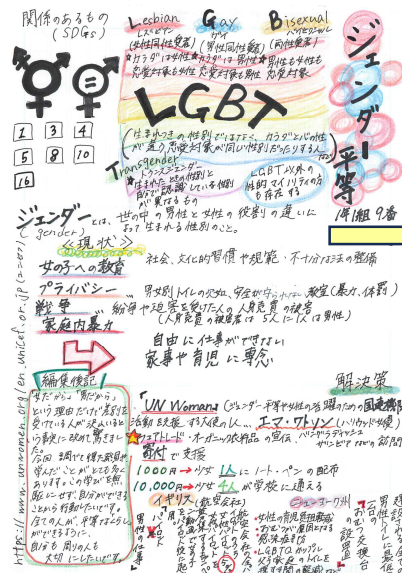


図4 SDGs 学習での活用

2.3 18歳成人レポートの作成

2020年入学生は、成年年齢が18歳に引き下げられる対象となる最初の学年であったため、総合的な探究の時間を活用して「18歳成人」の理解を深める目的で、5名の外部講師（弁護士・税理士・司法書士）がクラス単位で5つの内容の人権講座を実施した。以後クラスをローテーションして計5回、同内容の講座を実施することで、すべての講座について生徒がクラス単位で学習した。その後、生徒は人権に関するテーマを一つ決めて、その内容を「はがき新聞」にまとめ、学年全体で共有した（図5）。

※5つの講座の内容は、
①少年事件、少年犯罪【弁護士】

【実践データ】

【対象】
2020年入学生3年次
全5クラス194名

【時数】
総合的な探求の時間
計8時間

【使用サイズ】
A5サイズ

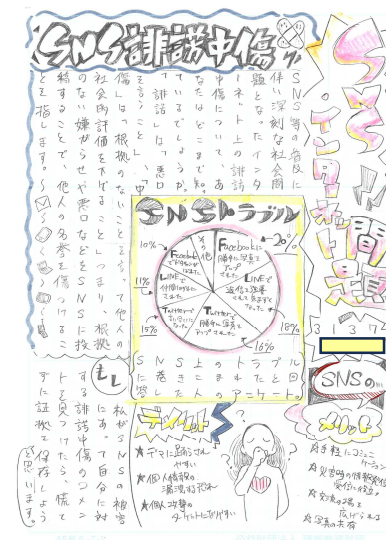


図5 18歳成人レポートでの活用

- ②税金・投資・保険等、社会生活にまつわるおカネの話【税理士】
- ③契約上のトラブル事例について【司法書士】
- ④インターネット・SNSにまつわる諸問題と近時の裁判例について【司法書士】
- ⑤就職・労働に関する基礎知識【司法書士】

2.4 「やさしい日本語」新聞書き換え講座

生徒が新聞記事を「やさしい日本語」を用いて「はがき新聞」にまとめ直す（図6）ことにより、母語である日本語についての理解を深めるとともに、多文化共生社会における情報伝達手段としての文章表現について考えた。生徒は

- ・どのような文章にすれば、読んだ人に伝えたい内容がよりよく伝わるか
- ・伝えたい内容の要点をどのようにすればまとめられるか
- ・興味関心が高まる紙面レイアウトにするにはどうすればよいか

等を踏まえながら、話し合いやICTの活用により、興味を持って書き換えに取り組んだ。

【実践データ】

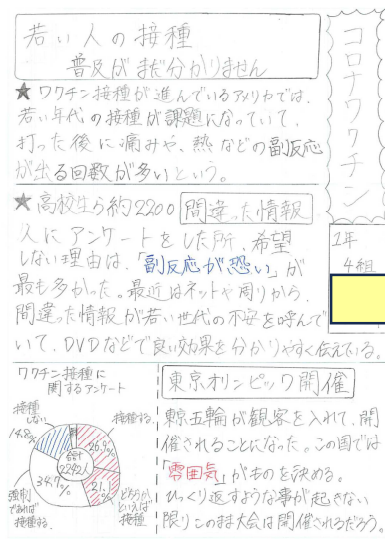
【対象】

コミュニケーション類型1年次
2021年入学生30名
2022年入学生30名
2023年入学生29名
2024年入学生28名

【時数】

コミュニケーション基礎
計5時間

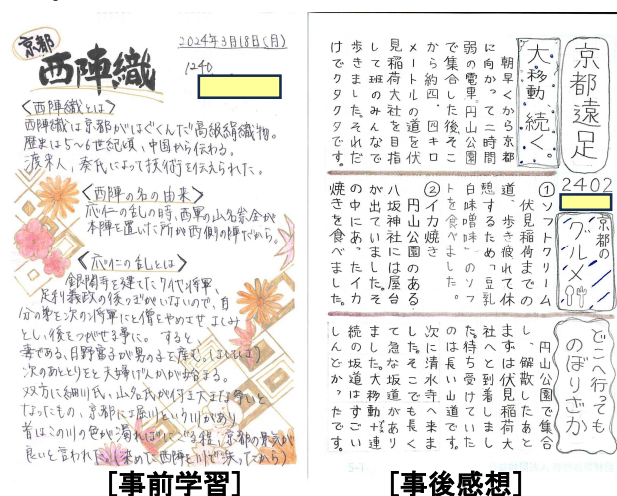
図6 新聞記事の書き換え例



2.5 校外学習の事前事後での活用

GIGAスクール構想により進んだ教育のデジタル化やSNSの発展の中、はがきを書いて実際に投函するといった旧来の文化は今後、教育の過程における体験により守られる重要な要素になると筆者は考えた。そこで今回、本校の2年生が実施する京都遠足を題材に、高校生に「はがきを書いて投函する」経験を持たせると同時に、事前学習および事後の振り返りにおける「はがき新聞」の活用（図7）、学年通信における特集記事の掲載により、研修先である京都への興味・関心・探究心を深めると共に自己表現力を高める試みを行った。

本実践を行った学年は、入学時から繰り返し「はがき新聞」の作成を行っているため、見出しの付け方や図・イラストの入れ方など、生徒の表現力が高まっている。しかし、京都調べ学習においては情報の出所や引用先を明らかにしていない作品も多くあり、これらを明記に対する指導の必要性を感じた。また図8に示すように、はがきを出す習慣のない生徒への指導の要点（敬称の付け方、必着の意味など）が明らかとなった。これら以前は生活の中で得られた知識についても、学習の機会を持つ必要があると考える。



【事前学習】

【事後感想】

【実践データ】

【対象】2023年入学生2年次・3年次 全5クラス189名
【時数】家庭学習とLHR 計2時間
【使用サイズ】はがきサイズ

図7 行事感想「はがき新聞」

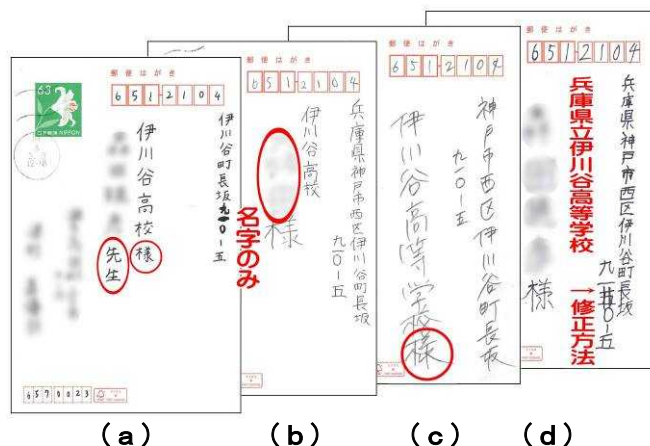


図8 指導を要する表書きの例

2.6 オープンキャンパスの生徒間共有

2年次の夏季休業前に進路別ガイダンスを実施し、生徒はそれを受けて夏季休業中に大学・

専門学校等のオープンキャンパスに参加し、内容を生徒間で共有することを目的に、報告書を「はがき新聞」にて作成する課題を課した。結果、生徒間で共有できるレベルの提出作品が少なく、廊下に掲示して生徒が互いに内容を共有するまでには至らなかったが、提出作品の中には「他者が見る」事を念頭に分かりやすくまとめられたものも多数あり、生徒の進路に対する意識の違いを知る例ともなった（図9）。

【実践データ】

【対象】
2023年入学生2年次
全5クラス198名

【時数】
夏季休業中課題

【使用サイズ】
A 5サイズ



図9 行事感想「はがき新聞」

3 まとめ

「はがき新聞」の活用は、高校においてもまとめる能力や表現力の学習に活用できることが実践の過程およびその成果物から示された。「はがき新聞」の大きな特徴である「読み手を意識」した作成が、

- ・何を伝えたいか
- ・どうしたらよく伝わるか

を常に考えながらの作成に繋がったものと考ええる。また、上記のことを行なうために、生徒は紙面に表す内容を事前に頭の中で推敲し、他者の表現法も取り入れることで、「はがき新聞」の質が向上していく過程を見て取ることができた。

高校における「はがき新聞」の活用は、書き方等の説明を最低限に留めることが、生徒の自由な発想を促し、様々な様式の作品作成に繋がったものと考ええる。さらに、作品は廊下に掲示することで簡単に生徒間共有することができる

ため、他者に見られるという意識が作品の向上にも寄与したものと考ええる。

日常的な「はがき新聞」の活用は、生徒だけでなく教員の「はがき新聞」に対する活用の閾値を下げることに繋がった。「はがき新聞」の予備用紙を多数保管し、教員が自由に活用できるようにしたことで、教員が様々な場面で独自の使い方を行なうようになった。

体験するという面においては、「はがき新聞」の活用から実際にはがきを書いて投函するという経験までを生徒に行なわせることができた。また本文中では触れていないが、活用するはがき（63円の官製はがき）について、投函の実践時に郵便料金が85円に変更されていたことから、生徒は22円切手を貼るという経験も得ることができた。SNSでのコミュニケーションが中心となった現在、切手の貼り方も「日々の生活の中で学ぶ」から「教育活動の一環として教える」必要があることが、生徒の切手の貼り方を通して筆者は考えた。

最後に、「はがき新聞」の活用は、日本語教育や多文化共生の分野でも活用されると筆者は考える。その活用法として考えられるのは、

- ・「はがき新聞」の作成に「やさしい日本語」を用い、外国人との交流を図る。
- ・日本語を学習する外国人が、「はがき新聞」を作成することで、日本語の学習とともに、日本独特の縦書き横書きが混在する紙面文化を学ぶ
- ・日本の生徒が多文化共生を意識しながら英語で「はがき新聞」を作成する。

などである。「はがき新聞」は、N I Eの3要素「新聞を活用する」「新聞をつくる」「新聞の機能を知る」のうち、「新聞をつくる」に該当するが、当然のことながら「新聞の機能を知る」にも繋がる大切なN I E活用実践である。